房総の文化財

VOL. 16
平成10年8月20日
財団法人 千葉県文化財センター
〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2
TEL 043-422-8811(代)
FAX 043-422-8850

ISSN 0919-0848
Bōsō no bunkazai

発掘調査速報

日本最大の環状ブロック ―印西市泉北側第3遺跡―

泉北側第3遺跡は、北総台地の北のはずれに近く、手賀沼から東に流れ出て利根川に注ぐ六軒川の支流、亀成川を北にのぞむ小さな谷の東側に続く標高24ｍの台地の上にあります。利根川本流から南へ直線にして2㎞も離れていない所です。

周辺を見渡すと一番最初に目に付くのが携帯電話の電波塔です。塔の向こう側には大きなビルが建ち並び、21世紀への胎動を感じます。一方、遺跡の周りには桜の大木があり、キジが飛びかい、ヒバリの鳴き声が響きわたっています。遺跡の西側の谷には湧き水を溜めている池があり、ザリガニが動きまわり、別世界に飛び込んだような錯覚におちいります。

印西市泉北側第3遺跡全景

発掘調査は平成9年9月から実施され、縄文時代早期の土器が含まれている地層と江戸時代の野馬堀が見つかりました。そして、今年度は地表から1ｍ50㎝くらいの深さの関東ローム層の中から2万5千年前の旧石器時代の石器や石器の材料が集中している所=ブロックを見つけました。同じ深さで石器のブロックがいくつも見つかり、まるでドーナツのようにつながって、直径が70ｍにもなっています。このようなつながりは、考古学では環状ブロックと呼ばれています。この遺跡では、環状ブロックの内側に、さらに別の小さな石器のブロックもありました。環状ブロックは、まだ発掘の例が少ない貴重なものです。石器の材質には、安山岩・頁岩・チャート・瑪瑙・凝灰岩などの多くの種類がありました。剥片（石器を製作するときの破片）に混ざって、石刃やナイフ形石器などの製品も見つかっています。

遺跡を発掘していると、当時の人々が生活した地面や発見された遺物に触れることで、2万5千年前に生きていた人々の息づかいが感じられるようです。

（竹田　良男）

環状ブロック

収蔵遺物コーナー

磨かれた石器と砥石 ―成田空港内遺跡より―

今回紹介する遺物は、新東京国際空港内の成田市東峰御幸畑西（空港№61）遺跡から見つかった「刃部磨製石斧」と、天神峰最上（空港№64）遺跡から見つかった「有溝砥石」です。

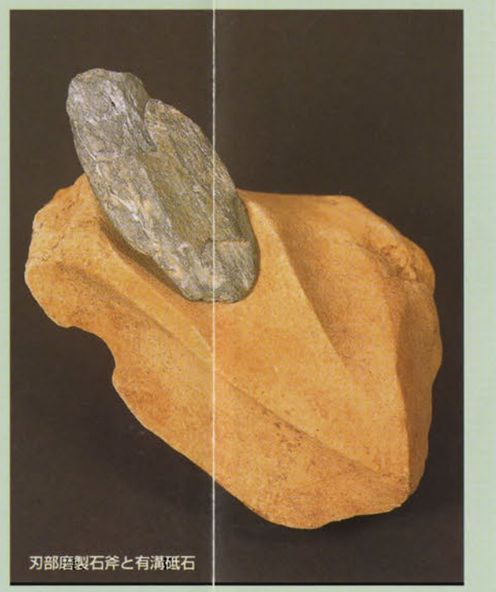
石斧は蛇紋岩製で、両側から刃の部分が磨かれています。石器が磨かれて作られるのは、世界史の上では、新石器時代（1万年以後）からとされていますが、日本の各地では、それより早く、旧石器時代の2万7・8千年前の地層から、写真のように、刃を部分的に磨いた石器が見つかっています。私たちはそのような石器を「刃部（局部）磨製石斧」と呼んでいます。

この石斧を磨く（研ぐ）のに必要なのが砥石です。砥石は、砂岩製で、上面に2条、両側面に各1条の溝ができています。ちょうど石器の大きさに合っているのが分かると思います。刃こぼれなどによって切れなくなった時に、現代の私たちが包丁を研ぐように何度も研いで新鮮な刃を再生させたのでしょう。

一般的に石斧は、木の伐採や加工、骨や角の加工、皮なめしに使われたと考えられています。ところが、長野県の遺跡から見つかった刃部磨製石斧の刃の部分に付着した脂肪を分析したところ、ナウマンゾウやオオツノシカの脂肪が見つかったという人もいます。大型の動物の狩猟や解体作業に、この種の石斧が使われたのでしょうか。

千葉県内では、今回紹介したような石斧は約30点見つかっていますが、有溝砥石は、千葉市餅ヶ崎遺跡、市原市草刈六之台遺跡から、1例ずつしか発見されておらず、大変珍しい資料といえるでしょう。

（永塚俊司）


刃部磨製石斧と有溝砥石

遺跡今昔物語

むかし「東海道」いま「高速道」 ～館山自動車道物語～

市原サービスエリア（写真提供　日本道路公団）

館山自動車道は、平成7年7月に千葉市から木更津市まで開通しました。この道路はアクアライン（東京湾横断道路）にもつながり、首都圏の地域間相互の連絡を促進する道の1つとして機能し始めています。この道路工事区域内には、25か所の遺跡があり、昭和63年に発掘調査が始まり平成6年に終了しました。その結果、古代の東海道*に連なる道の跡のほか、旧石器時代から中世までの貴重な資料を数多く得ることができ、西上総地域の歴史の解明のために新たな手掛かりを加えることができました。

（渡辺昭宏）

＊東海道：古くは、都を出て相模国から東京湾の浦賀水道を渡って上総国に上陸して北上し、下総国を経て常陸国へ向かうのが東海道の本道でしたが、宝亀2年（771）に相模国から陸路で武蔵国を経て下総国に入る道筋に変更されました。

村田川と養老川にはさまれた低地では弥生時代から、すでに米づくりをしていました。

奈良時代になるとこのあたりには、上総国の役所や郡の役所が集まり、国分寺や国分尼寺も建てられました。これらの役所などに向かう「東海道」が東京湾の方から続いていて、多くの人々の行き来があったようです。その当時の木簡（木の荷札）も見つかっています。

市原サービス・エリアのまわりの台地には、旧石器時代から人々が暮らしはじめ、縄文時代早期にはたくさんの人々が訪れていました。とても多くの屋外炉の跡が残っているのに住居跡はまったくありません。また、焼けた石が大量に見つかった所もあるので、バーベキューをしたのかもしれません。今のキャンプ場みたいですね。

小櫃川のまわりでも弥生時代の終わりごろから米づくりが行われていました。こうした米づくりをとおして富をたくわえたムラの長が、高台に古墳をつくったのかもしれませんね。

また、小櫃川を挟んだ南北の高台には中世の特色ある遺跡があります。北側の山谷遺跡のあたりには今でも「鎌倉街道」という地名があり、ここでみつかった道路跡は、地名のとおり房総の武士団が「いざ鎌倉」の時に通った街道の一つです。南側の笹子城跡は、下の写真のように戦国時代の大きな城跡です。

※各遺跡とも複数の時代にまたがっていますが、紹介はおもなものに限ります。

● は、その他の遺跡

笹子城跡

埋文アラカルト

最古のペンダント？

自分の身体を美しく飾りたいという思いは、遠い古のころから変わりはないようです。

写真は、四街道市出口鐘塚遺跡で発見された、旧石器時代の「垂飾様石製品」です。「垂飾」とは、ペンダントなどのように、紐を通して「垂らして飾る」装身具のことです。出土した地層の様子から、約2万8千年前に作られたものだと考えられています。大きさは、写真左が長さ約22㎜、幅約21㎜で、砂岩でできています。装身具というと、弥生時代や古墳時代の勾玉や管玉が有名ですが、それよりも2万年以上も前に「垂飾」らしい装身具が作られていたことは大きな驚きです。

しかし、穴を開けた部分がわずかしか残っていないために、「垂飾」であったかどうかは意見が分かれており、現時点では「垂飾様石製品」と呼んでいます。どちらにしても最古の装身具であることには間違いないようですが、国内ではほかに出土した例は数例しかなく、判断を難しくしています。

（石田　清彦）

Q&A

Q　この前見たテレビのニュースで、古墳からたくさんの三角縁神獣鏡が発掘されたと放送していました。あの鏡には、何か特別な意味があるのでしょうか。

（様々な表情の神像と霊獣像『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部博物館図録より）

A　たくさんの鏡を出土した古墳といえば奈良県天理市の黒塚古墳のことだと思います。見つかった鏡は34面で、そのうちの33面が三角縁神獣鏡だったのでさらに注目されることになりました。

神獣鏡とは、東王父、西王母などの中国の伝説上の神像と竜や虎などの霊獣の文様がある鏡で、その中で縁の断面が三角形をしているものを三角縁神獣鏡と呼んでいます。この鏡は、邪馬台国の女王卑弥呼が3世紀中ごろに中国の魏の国からもらった鏡ではないかと言われていますが、そうではなくすべて日本製だという意見もあります。

三角縁神獣鏡は、北は福島県から南は鹿児島県まで、日本各地の初期の古墳から450面以上も見つかっています。奈良県では90面以上、近隣の京都府、大阪府、兵庫県と当時の先進地である福岡県では40面以上見つかっていますが、このような分布状況から、この鏡は、奈良に本拠を置くヤマト政権が、何らかの政治的意図をもって各地の有力な豪族に分け与えたものと考えられています。

千葉県では木更津市の手古塚古墳と香取郡小見川町の城山1号墳から1面ずつ見つかっています。政権の中心から遠い当時の房総には、ヤマト政権とつながりの深い豪族が多くなかったことを物語っています。ただし、まだ発掘されていない古墳の中に、この鏡を副葬しているのではないかと推定される大型の前方後円墳が何基か存在することも忘れてはなりません。

（蔀　淳一・立和名　明美）

（三角縁唐草文帯四神四獣鏡『雪野山古墳の研究』報告篇より）

■表紙について

注口土器
（君津市寺ノ代遺跡出土）
縄文時代後期、注ぎ口のついた土器

撮影：堀越知道